

山城における弥生式文化の成立

——畿内第I様式の細別と雲ノ宮

遺跡出土土器の占める位置——

佐 原 真

【要約】 京都府雲ノ宮遺跡は、山城で最古の弥生式遺跡である。私はこの遺跡の土器にせつして以来、畿内の前期弥生式土器を古・中・新の三段階に大別する考えをもつようになった。本稿では、雲ノ宮遺跡とその土器についてのべたのち、現在までに提案された畿内第I様式の細別案を紹介する。ついで、最古の弥生式土器である北九州の板付式土器の壺の成形方法に起源をもつ口縁部・頸部・胴部を区別する紋様が畿内ではいかにかわつてきているかを検討したのち、板付式土器にない区分紋様として、「削り出し突帯」と「貼り付け突帯」とをとりえ、削り出し突帯出現に先立つ段階、貼り付け突帯の出現した段階をそれぞれ目安として、第I様式土器を三段階に大別する。これにしたがつて雲ノ宮遺跡の土器が第I様式(仲)に属することをみとめて、山城の弥生式文化の成立時期を決め、その伝播経路、隣接地域との関連などについて言及する。 史林 五〇巻五号 一九六七年九月

はじめに

京都府長岡町雲ノ宮遺跡は、昭和三五年、名神高速道路の建設工事のさいに、中山修一氏が発見した弥生式遺跡である。京都府教育委員会は、同年一二月末に調査を実施し、

横山浩一・田辺昭三氏が現場を担当した。

昭和三七年、東海道新幹線の敷設工事の際、中山氏は、雲ノ宮遺跡の北一キロメートルの長岡町の鶏冠井かいかいで弥生式遺跡をふたたび発見した。京都府教育委員会が調査を実施し、田辺氏と佐原がそれを担当した(田辺昭三・佐原真一九六五)。

この二つの遺跡の発見によって、山城の弥生式文化が前期にさかのぼることがはじめて明確となり、山城の弥生式

文化の系譜についても、従来の考えを訂正することになったが、私は、雲ノ宮遺跡と鶏冠井遺跡の土器の比較から出発して畿内の前期弥生式土器、すなわち、畿内第一様式土器を古・(中・新)の三段階にわけける考案をいさぐようになつた(田辺昭三・佐藤真一九六六)。

本稿では、まず、雲ノ宮遺跡とその遺物を紹介したのち、第一様式土器の細別を論じ、最後に、山城の弥生式文化の成立をめぐる諸問題を考える。

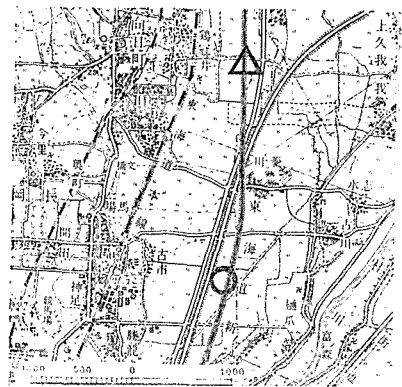
起稿にあたり資料について便宜をはかって下さった有光教一先生、資料の公開をゆるされた横山・田辺両氏、多くの教示をいただいた中山氏、測図・製図に協力ねがった工楽善通・石井則孝・高島忠平・阿部義平氏ならびに遅筆の私を終始督励された近藤喬一氏に感謝の意を表する。

I 雲ノ宮遺跡

A 遺跡

雲ノ宮遺跡は、京都府乙訓郡長岡町神足(かみあし)にあり(国土地理院五万分一地図「京都西南部」東北隅から一九・二センチメートル、東南隅から二〇・四センチメートル)、標高は約一三メー

トルである。この地は、西に長岡丘陵、東に桂川の右岸堤防をのぞみ、永らく、京都盆地西南部のどかな水田地帯の一部をなしてきたが、い



第1図 雲ノ宮遺跡の位置
○雲ノ宮遺跡 △鶏冠井遺跡

まや、喧噪たる現代にとりかこまれて(第一図)。神足付近では三つの鉄道が、東から東海道新幹線・東海道本線・阪急電鉄の順に、平行してほど南北に走っている。そして新幹線と本線との間には、名神高速道路が、やはりそれらと平行にのびている。中山修一氏の調査によると、土器片が散布しているのは、新幹線と高速道路とはさまれた、東西約一〇〇メートル、また古市の部落から東にのびてきた道を北の限界として、南北も約一〇〇メートルの範囲内である。遺跡の東北には、小野田セメント工場があつて、好適な目標物となっている。中山氏がこの遺跡で採集

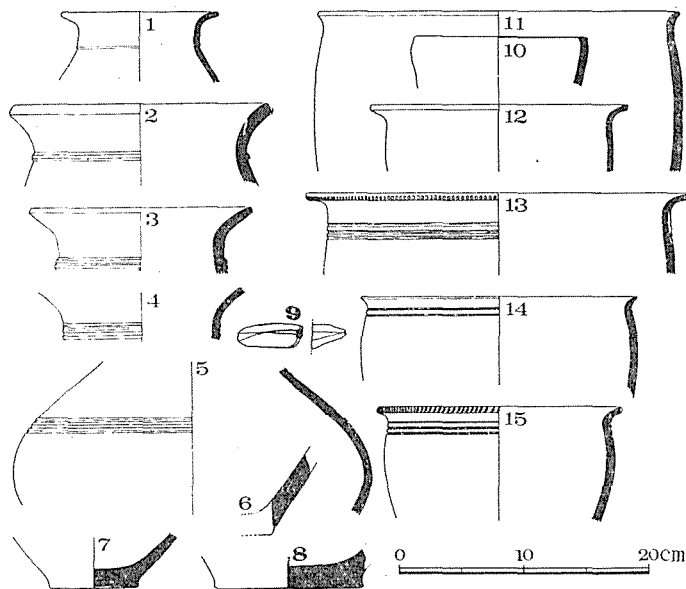
した遺物には、ここでとりあげる第Ⅰ様式土器のほかにも、
第Ⅱ様式・第Ⅲあるいは第Ⅳ様式土器もみられ、長岡京時
代の土師器・須恵器、中世の瓦などもある。

横山・田辺氏は、方形発掘区(二×二メートル)を三カ所
もうけ、第Ⅰ様式土器の包含層の存在を確認した。包含層
は有機質の色によって暗褐色をていしており、耕土(〇〜
一五センチメートル)と床土(青色粘土に酸化鉄の沈澱したもの。
一五〜三八センチメートル)の下にあり、これを粘質をおび
た上部(三八〜五〇センチメートル)と、砂質をおびた下部(五
〇〜七〇センチメートル)とにわけて遺物を採集した。なお、
耕土中には土師器と瓦器、床土中には土師器・須恵器をふ
くんでいた。

B 遺物

雲ノ宮遺跡の弥生式土器は、およそ五〇〇片、ミカン箱
一杯ていどの少量である。包含層で出土した土器のうち、
口縁部・頸部や紋様などで時代のわかる五、六〇片の破片
は、ほとんどすべて第Ⅰ様式にぞくしている。これらの土
器の胎土の中には夾雑物として多量の砂粒を混入しており、
前期の土器としての特色をよくしめしている。いっぽう他

の地点で採集した第Ⅱ〜第Ⅳ様式の土器では、砂粒混入が
多いものでも第Ⅰ様式ほど顕著ではない。あるいは微量で
ある。したがって包含層中出土の土器の大半をしめる、無



第2図 雲ノ宮遺跡の前期弥生式土器 縮尺1/6

紋の胴部破片もまた多量の砂粒をまじえていることによつてすべて第Ⅰ様式と判断してよい^①。土器の色は暗褐色・灰色のものが多く、赤味をおびているものはすくない。器壁の深層は暗灰色をいするものが多く、焼成は最上とはいえない。このほか黒斑^②をのこすもの、甕などには煤が付着するものなどがある。

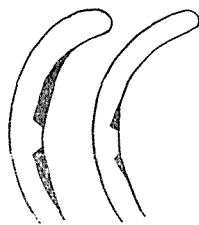
器種には壺・鉢・甕がある。

壺 部分ごとに記述する。口縁部はあまり大きくひらかない。端面はまるみをおび、その上に、加飾はない。蓋に対応した紐孔をもつものがある。他に口縁部が広くひろくものが少しある。端面はほと平らに面どっている。このうち一例は端面下端に刻目紋をもっている。包含層上部の出土であつてあるいは第Ⅱ様式にさがるものかもしれない。口縁部の下には、(1)段をつくりだしているもの(第二図1)、(2)篋描きの直線紋を二条かそれ以上めぐらしたもの、(3)突帯をめぐらしたものがある。

この突帯は粘土紐をはりつけてめぐらしたのではなく、突帯にする部分だけをのこしてその上も下も段状にけずりとしたものであるから、これを「削り出し突帯」の名でよ

び、さらにこれに第Ⅰ種・第Ⅱ種の二種類をみとめたい。削り出し突帯の第Ⅰ種は幅数ミリメートルで、上面に篋描き直線紋をくわえていないもの(第二図2)であつて、第Ⅱ種は幅ひろく、突帯上面に篋描き直線紋をひいたもの(第二図3・4)である。

よその遺跡の实例をもあわせ検討すると、削り出し突帯には高く突出したもの(「a種」と、低く扁平なもの(「b種」)に大別することもできる(第三図で黒くあらわしたのは削りとした部分)。



第3図 突帯種 a種 削り出し種 b種 左 右

a種は深くけずりだしたものであつて、また、削る範囲も幅広い。突帯上面はその上下の面をつらねた面上から外にはずれて突出している。当然ながら、突帯に近いほど深く、はなれていくほど浅いにあさく削るから、口頸部間のばあいを例にとると、けずり出すことによつて口縁部の外反の度合をやや強調することになる。b種は、浅くけずりだしたものであつて、また削る範囲もせまい。突帯上面は、そ

の上下の面をつらねた面上にのつている。削り出し突帯の上面には、円形竹管紋その他の刻目紋・刺突紋をくわえたものも多いが、本遺跡にはその実例がない。ただし、削り出し突帯第一種の下に木葉紋とみられる紋様の一部がみえる破片がある(第四図左)。

つぎに頸部から胴部にかけてみると、(1)頸部側に低く胴部側に高い段があり、段の下に篋描き直線紋を二〜四条めぐらしたもの(第三図⑤)、(2)削り出し突帯第一種あるいは第二種をめぐらしたもの、(3)篋描き直線紋をめぐらしたものがある。直線紋の数は二、三条をふつうとする。一例のみでは、六条の細い直線紋に短い縦線をくわえている(第四図中)。

鉢 外反する口縁部をもつふつうの鉢と、口縁部が内彎ぎみにたつ鉢(第二図10)とがある。前者からはがれた瘤状把手が一つある(第二図9)。

甕 頸部を無紋とするもの(第二図11・12)と、ここに篋描き直線紋を一〜三条めぐらすもの(第二図13・15)とがある。この両者のおおのに、口縁端に刻目紋をくわえたもの、くわえないものがある。なお、頸部に3条の直線紋をもつ



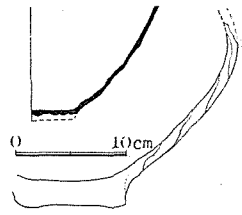
第4図 雲ノ宮遺跡出土弥生式土器の紋様

一例では、直線紋の間に刺突紋を配している(第四図右)。

土器成形についての一所見——擬口縁いっぽんに、粘土帯をつみあげる方法で土器を成形するさい、粘土帯上端に手をくわえて、その上にのせる粘土帯との接着を強固にする工夫がしばしばおこなわれる。ところで粘土帯をつみ重ねる土器の成形方法においては、下になる粘土帯は、その上にくる粘土帯の重さによって変形をこうむらないでいどにかわいていなければならない。この合わせ目の

部分で土器がわれると、粘土帯上端は、たんなる破面をなせず、平滑で一見口縁部のようにみえ、上にくる粘土帯下端は、下の粘土帯の上端の逆の形状をていすることになる、英国のステブソンはこのようにわれた粘土帯上端を false-rim^④ 擬口縁とよんでいる [Stevenson 一九五三]。

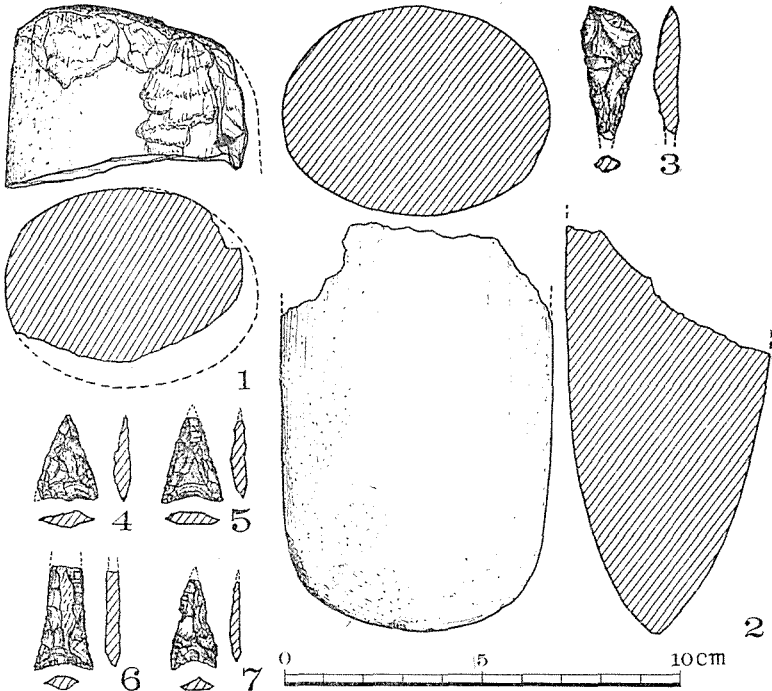
雲ノ宮遺跡の第一様式土器には、粘土帯の端がななめに



第5図 成形過程をしめす土器
上 大阪府船橋遺跡 (縄文晩期末)
下 大阪府瓜生堂遺跡 (弥生前期)

なつてはがれたものがいくつかある。面がほぼ平らなので、擬口縁かその逆形か

の区別はむずかしい。いずれにせよ粘土帯上端を斜面につくれば、つぎの粘土帯との接着面が広くなる理屈である。そして、この斜面には、土器の外側側に高く内側側に低いもの（内傾とよぶ）と、内側側に高く外側側に低いもの（外傾とよぶ）とがありうるが、上下が判別できない破片にかんしては、そのいずれかをきめることはできない。しかし、底部に直続すると信じられる一例では、上下端とも外傾の斜面をもっている(第二図6)。雲ノ宮遺跡の、外傾の擬口縁は、畿内第一様式の成形方法として特殊な例ではなく、通有なものらしい。東大阪市瓜生堂遺跡出土の第一様式土器の壺は、やはり外傾の擬口縁をもつ好例である(第五図下)。こ



第6図 雲ノ宮遺跡の石器 縮尺1/2

の事例ではその斜面に指頭で凹みをつけており、これに庇じて上にくる粘土帯下端には、それがポジティブにうつっている^⑥ (第五図下)。

鶏冠井遺跡の土器とのちがい 雲ノ宮遺跡の第一様式土器は、鶏冠井遺跡のそれとはかなりことなるものである。鶏冠井(田辺昭三・佐原真一九六五)の壺には雲ノ宮の壺に通有な段や、削り出し突帯はみられない。その反面、壺の頸部や胴部にめぐらす筥描き直線紋の条数は多い。四条以上がつうであり、一〇条におよぶものもある。そして、粘土紐をはりつけた突帯紋がある。「粘土帯」貼り付け突帯は、粘土紐をはりつけてこれを回転台上で横方向になでつけてしあげた突帯である。一条でもちいるもの、複数でもちいるものの別がある。甕においても頸部に四、五条、あるいは八条の直線紋をもちいたものがある。両遺跡の土器はともに量的にはとばしいけれども、その対照はきわめていじらしい。この差違の意味については、後でとりあげる。

石器 包合層中から、第一様式土器にもなつて大型蛤刃石斧の頭部破片1個(第六図1)と石鏃1個(同4)とが出土した。他に付近で大型蛤刃石斧の刃部をふくむ破片

(同2)、石錐(同3)、石鏃3個(同5-7)、剥片石器1個を集めた。打製石器はサヌカイト製、石斧は硬質砂岩製である。石鏃4は一グラムある。

II 畿内第一様式の細別

A 今里・杉原・小林三氏の考え

畿内第一様式の細別については、いままでどのように考えられてきたか。

今里幾次氏の吉田式・西瓜破式 昭和一七年、今里幾次氏

は、大阪府瓜破遺跡採集の土器によって、畿内第一様式の細別をこころみた(今里幾次一九四二)。今里氏の西瓜破第一類土器の分折は精緻であるがここにその大要を紹介する。

壺形土器の「口縁部は通常緩かに外反し、余り長くはないが、中にはやや強く水平近くにまで反転し、少し長く発達するものがある」。口縁端部は無紋のものほか刻目紋・綾杉紋・直線紋などをくわえたものがある。頸部はなだらかに屈折し、筥描きの直線紋をほどこしたものがもっとも多く、突帯直線紋の使用例がこれについている。まれには、この両者を併用したものもある。腹部は張りがつよい。紋様

は上腹部にみられ、「大部分は頸部に近い上位の部分と最大腹径部に近い下位の部分とに二つに分けられ、複雑なものは頸部に連接して上腹部一面に涉つてゐる」。やはり篋描き直線紋が多く、突帯直線紋がこれについており、両者併用の実例もある。特殊な紋様としては、胴上部と中部の突帯直線紋のあいだを縦の突帯で区画し、そこに突帯重弧紋をいれたものがある。ふつうの壺以外には、無頸壺で、突帯と篋描き直線紋とを共有したものがあり、また、細頸壺とみられるものに篋描き流水紋をほどこしたものがある。

鉢は口縁の外反するものが多く、直口のものがかこれについている。瘤状把手がつくものがある。そして直口のものに限って、条数の多い篋描き直線紋をくわえている。

甕の形態には、胴の張りがよわいもの、つよいもの、口縁部が直角に突出して内側に稜をつくるもの、ほとんど直口に近いものなどの変化がある。頸部に紋様をもたぬ甕が概算で全体の三分の二以上をしめる。これには口縁部に刻目紋をもつものともたぬものがあるが、後者はとくに多く甕全体の二分の一をしめる。のこる三分の一が口縁下に篋描き直線紋をもつものである。その条数は一一一〇数

条におよんでいる。これらの多くは口縁部に刻目紋をもつが、ときにそれを欠くものもある。特殊例としては、四条の直線紋下に三角形刺突紋列をつけたもの、八条の沈線の間中に円形浮紋列を一列付加したもの、などがあり、また頸部に一条の突帯紋をめぐらしたものがある。

今里氏は詳細な分類のち、これらが畿内第一様式に所属しながら、畿内第一様式のもつ総ての特徴をそなえたものではなく「従来余り知られなかつた特徴をも有する」ことから、「それがほぼ単一の様相を保ち或る短い一時期に、一つの様式を構成した」と推察し、「西瓜破第一類土器は畿内第一様式の或る部分が様式として独立するものとも言へる」と考えた。ついで、畿内第一様式の中で、西瓜破第一類土器に共通しない部分の一つの様式を形成して存在する好例として兵庫県神戸市垂水区玉津町吉田遺跡をとりあげて、つぎのように両遺跡の土器を比較した。

先づ壺形土器に於ては、播磨吉田遺跡の土器が概して沈直線文線条の僅少、それ以外の篋描文・木葉状文・重弧文・斜格文・斜線文等の盛行、凸帯文の稀少、段の盛行、口頸部の短小、口唇の無文及び器面の研磨等の特徴によって貫かれるとすれば、

これと対蹠的に西瓜破第一類土器は一般に平行沈直線文の複雑化と直線化、平行凸帯文の盛行、段の衰退、口頸部の発達、時には口唇の施文、刷毛目の残存等の諸特徴を有し、更に吉田土器に見出されない無頸壺、細頸壺(流水文)が存在するのである。

そして、両遺跡の土器をくらべたばあい、壺類に差が明確であるのたいして、甕の類では差違が小さいことについては、飾られる土器、飾られぬ土器の性格に帰しうるものと説明したのち、西瓜破第一類土器と畿内第Ⅱ様式との近似性をあげ、いっぽう吉田遺跡の土器と畿内第Ⅱ様式との間には相当の差異がみとめられ、北九州の最古の遠賀川式土器に類似することをのべ、畿内第Ⅰ様式を前半と後半とに細別し、それぞれを吉田式・西瓜破式とよぶことを提唱したのである。最後に今里氏は畿内隣接地方の遠賀川式土器についても言及し、中部瀬戸内では吉田式に併行する土器からみとめられるが、伊勢湾沿岸では吉田式併行の土器はなく、西瓜破式併行からはじまっていることから、この東の地域がそれ以西よりも時期的におくれて弥生式時代に入ったことまで論じてむすんでいる。今里氏のこのすぐれた分析と解釈とがその後正当に評価されず、ほとんど引

用すらされていないのは不可思議である。

杉原莊介氏の唐古式(唐古Ⅰa式)・瓜破式(唐古Ⅰb式) 昭和二五年、杉原莊介博士は、畿内前期の土器を唐古式・瓜破式の二様式によびわけている(杉原莊介一九五〇)。内容については具体的にはふれていないが、三〇年になって畿内第Ⅰ様式が「口辺部の発達しない木葉文の盛行する壺と、口辺部が広く外方に拡がり隆起文の盛行する壺に分かれる」として前者を唐古式、後者を瓜破式としている(杉原莊介一九五五)。昭和三一年には、瓜破式の甕の説明として「口辺下部の平行沈紋の数が多くなる」とのべている(杉原莊介一九五六)。しかし杉原博士の瓜破式の内容が明確にされたのは、神沢勇一氏とともに瓜破遺跡の報告をまとめた際であった(杉原・神沢一九六二)。同遺跡の土器には壺・甕・鉢・蓋があり、このうち壺は二類、甕は三類に細別された。壺の第一類は、「口辺部が大きく外反し、筒形の頸部が徐々に胴部へ移行する」。「一般に頸部と肩部に平行沈線文帯がめぐらされる。なお文様部分を浮彫にしたもの(佐原注段と削り出し突帯とをさす)も多い。壺の第二類は、「口辺部が極端に外方に広がり、頸部は円筒形で短かく、胴部は

横に強く張り出す。「頸部と胴部に粘土紐をはりつけた平行隆線文帯がめぐらされる」。甕は、頸部下無紋の第一類、二―三条の直線紋をもつ第二類、それが四条以上一〇条におよぶ第三類にわけられた。杉原・神沢氏は、壺第一類と甕第一・二類がより古い一群、壺第二類と甕第三類がより新しい群をなすと考えている。

小林行雄氏の細別案 畿内第一様式土器のなかに、より古い様相、より新しい様相のあることには、畿内における遠賀川式土器の検出当初から、小林行雄博士がみとめていたことであった。すなわち、兵庫県吉田遺跡の報告には「小林行雄一九三三」、その土器が安満B類、すなわち畿内の遠賀川式土器より古い特徴をもつことの指摘があり、『弥生式土器聚成図録』・『大和唐古弥生式遺跡の研究』においては、第一様式のより新しき様相についての記述がみえる。さらにこの両書では、実測図の配列順序が、様式内での変遷の方向を有弁に語っている。このように小林博士は、第一様式のなかに古・新の様相をみとめたが、それをあくまでも一つの様式のなかでの変化とみとめたのである。

第一様式細別についての基本的態度

私は畿内第一様式を

一つの様式としてみとめ、そのなかでの新古を考える小林博士の立場を支持し、第一様式土器は、第二様式・第三様式土器にたいするものとして、一つの様式にまとめておくべきと考える^⑤。しかも、現状では畿内第一様式の細別は、特定の遺跡名を冠して唐古式・瓜破式などとよび分けられるほど明解なものとはおもわない。私は、そのなかに新古の様相がみとめられながら、なおはっきり分離できない様式にかんしては、それを一つの様式としてまとめておきたいとおもう。そして、それをさらにこまかくみるばあいには、古い要素、新しい要素、あるいは両者の中間的要素をみきわめ、これにしたがって、一つの様式を(古)・(新)あるいは(古)・(中)・(新)に大別する便法を仮りにとるのが適當であると考え。このようにして第一様式土器をみなおすとき、むしろ三段階にわけけるほうが適當であると思う。かつて坪井清足氏から、唐古第一様式は、愛知県西志賀遺跡にない段階、ある段階、そして突帯紋・筥描直線紋が発達した段階の三段階にわけけることもできる、という考えをきいたことがある。私の見解は、はからずも坪井氏の考えにしたがう結果となった。

B 畿内第I様式の三段階

板付式土器の壺の作り方 畿内第I様式土器の細別を考えるために、まず、最古の弥生式土器、すなわち、北九州の板付式土器をとりあげよう。

板付式土器の壺には、頸部と胴上部とに段をもつものが多い。まれには胴中部に段をもつものもある。また底部と胴部との区別も明らかである。この段は、土器の作り方と密接なかわりをもっている。すなわち、板付式の壺は、底部・胴部下半・胴部上半・頸部・口縁部の順に、下からつみあげて作っている。各部分の重ねあわせ方のうち、特に注意をひくのは、胴部と頸部との接合方法、頸部と口縁部との接合方法である。まず、頸部と胴部との重ねあわせ方は、頸部の下端が胴部上端の内側にはいるように幅広く重複させている。つぎに、頸部と口縁部とのばあいは、口縁部下端が、頸部の上端の外側にできるように幅広く重ねあわしている。仕上がった土器でみる頸部の幅は、内面では上にも下にももっとのびていることになる。このようにして口縁部・頸部・胴部のあいだには、それぞれいずれの場合も頸部側の方が一段低い段違いができるのである(第七図)。

板付式の区分紋様 板付式土器の壺には、このようにして

生じた口頸部間・頸胴部間の段をそのままのこしたものはなはだ多い。しかし、段をならして平滑にしたものもあり、また、段を平面的な表現におきかえたものか、この部

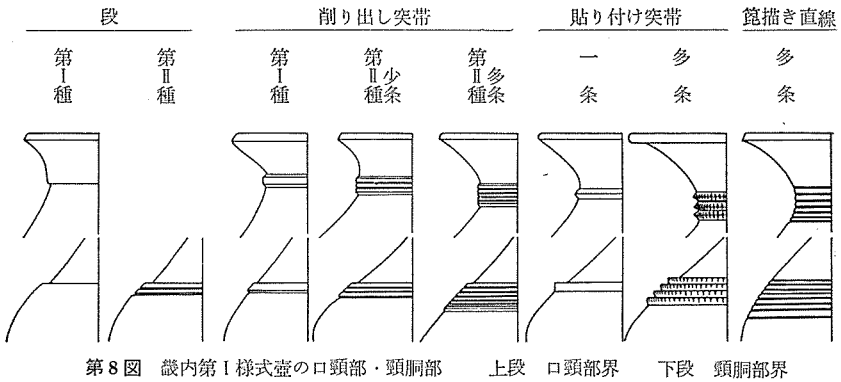


第7図 板付式壺の成形模式図

分に一、二条の篋描き直線紋をめぐらしたものもある。

このようにみると、段や直線紋は、頸部の紋様・胴上部の装飾というよりも、むしろ、

口縁部と頸部とをへだてる部分、頸部と胴部とをへだてる部分にそれぞれおかれており、区分の役割をはたしているとみることができ。以下の記述では段をも紋様のなかにふくめ、口縁部と頸部とを区分する紋様を、口頸区分紋様、頸部と胴部とを区分する紋様を頸胴区分紋様とよび、そのおのおの部分を口頸部界・頸胴部界、口頸部界より上を口縁部、口頸部界と頸胴部界との間を頸部、口頸部界以下を胴部とよびわけ。なお、板付式の頸胴区分紋様としての段には、それにせつして篋描き直線紋をめぐらしたものがあ。この部位には、a段の下すなわち胴部上端、b段



の上すなわち頸部下
端、c 段の上下の三
者がある。いまこの
三者をふくめ、篋描
き直線紋をともなう
段を、第Ⅱ種とよん
でそれのともなわぬ
段を、第Ⅰ種として
区別する。板付式の
壺の篋描き紋様には、
直線紋以外にも綾杉
紋・山形紋・重弧紋
その他の紋様があり、
また各種の彩紋があ
るが、いずれをもち
いる場合においても、
口頸部と頸胴部の区
分紋様は各種の紋様
帯の境界、あるいは、

紋様帯のなかの界線としてとりいれられており、紋様がこ
の境界をのりこえるものはないらしい。いっぽう、胴部の
紋様はその下の端にかんしては、はつきりとしたきまりが
なく、下端を線で表現するしないにかかわらず、胴のもっ
ともはつている部分に下端をもつばあい、紋様がさらに胴
下半の一部におよばあいなどがある。板付式にみた区分
紋様のルールは、板付式以後においても厳然とまもられて
おり、これに違反したものはすくない。
板付式の壺 板付式の壺のうち、後に関連をもつ要素の
みをあげておく。板付式の壺はその口縁部に刻目紋をもっ
ている。頸部に段のあるもの(頸部側が低い)とないないもの
の区別がある。後者には胴部上半にも刻目紋をめぐらした
ものがある。
畿内第Ⅰ様式壺の削り出し突帯・貼り付け突帯 畿内第Ⅰ様
式の成形方法は未解決であつて板付式と同じ方法がそのま
まとられたかどうかはわからない。しかし、板付式にみた、
口縁部・頸部・胴部の確然たる区別は、畿内第Ⅰ様式の壺
においてもみとめることができる。口頸部界・頸胴部界に
は段第Ⅰ種・第Ⅱ種、篋描き直線紋をもちいている。段第

Ⅱ種はほとんどaにかぎられる。このほか板付式にない要素として突帯の使用がさかんである。そして突帯には、まったく性質のことになった二つのものがある。一つは、雲ノ宮遺跡の壺にも特徴的な、削り出し突帯であつて、他の一つは鶏冠井遺跡に見られ、また、瓜破遺跡の土器に顕著な貼り付け突帯である。これら二種の突帯の間には、施紋の方法という技術的な違いだけでなく、さらに本質的な差違がよこたわっている。すなわち、削り出し突帯の多くは区分紋様の役割をはたしているのたいして、貼り付け突帯は、全体が幅広い带状をなしており、このばあいは口頸部と頸部などをへだてる紋様というよりはむしろ、それ自体が頸部におかれた带状の紋様というべきである(第八図)。胴部上半においては、数条からなる貼り付け突帯の带状紋を二、三段重ねもちいることもさかんである(第九図上段右)。このように削り出し突帯・貼り付け突帯は、ともに畿内のものでありながら、前者は、板付式以来の区分紋様の性格をもつており、後者は性格自体も変質して区分紋様の意味をうしない、紋様帯に化しているのである。貼り付け突帯は型式学的に削り出し突帯より後出といえるであろう。そ

して、上面に篋描き直線紋を四条以上めぐらした削り出し突帯に限つて带状紋様の性質が認められる(第九図上段右から二つ目)ことは、これらが削り出し突帯の中で、より後出のものであることをしめすものといえよう。

右にみた削り出し突帯から貼り付け突帯への変化、区分紋様から带状紋様への変質に共通する現象は、篋描き直線紋のなかに、みとめられることである。すなわち、畿内第一様式の篋描き直線紋には、条数がすくなくて、なお、区分紋様をなしているもののほかに、条数も多く、幅広い带状紋様をなしているものがある。これら带状紋様は、胴部上半においてはしばしば二―三段に重ねられている。いまや、篋を櫛にもちなおせば櫛描き紋である。ところで、いま、本質的な差をもつものとした削り出し突帯と貼り付け突帯、条数のすくない篋描き直線紋とは、じつさいの土器では、はたしてどのような関係にあるか。

紋様の組み合わせ 表現を簡便にするため、篋描き直線紋が一―三条のものを少条、四条以上のものを多条と呼びわけ、奈良県唐古遺跡の報告書によつて第一様式壺五七個について検討しよう。各紋様相互の関係を整理すると、

頭胴部区分	口頸部区分	段 第Ⅰ種	削り出し突帯 第Ⅰ種	削り出し突帯 第Ⅱ種(少条)	篋描き直線紋 少条	区分紋様なし	削り出し突帯 第Ⅱ種(多条)	貼り付け突帯	篋描き直線紋 多条
段Ⅰ		A	B						
段Ⅱ		A	AB	B	AAA BB				
削り出し突帯Ⅰ			A						
削り出し突帯Ⅱ(少条)			A	A-B					
篋描き直線紋(少条)					AAA AAa aaaa	AAa aBb			
区分紋様なし			Ab		Aa	AA aa	A-B		C
削り出し突帯Ⅱ(多条)									C
削突Ⅱ(多条)+貼突								C C	
貼り付け突帯								CCC	
篋描直線(多条)							B-C	B-C	CCC CCC

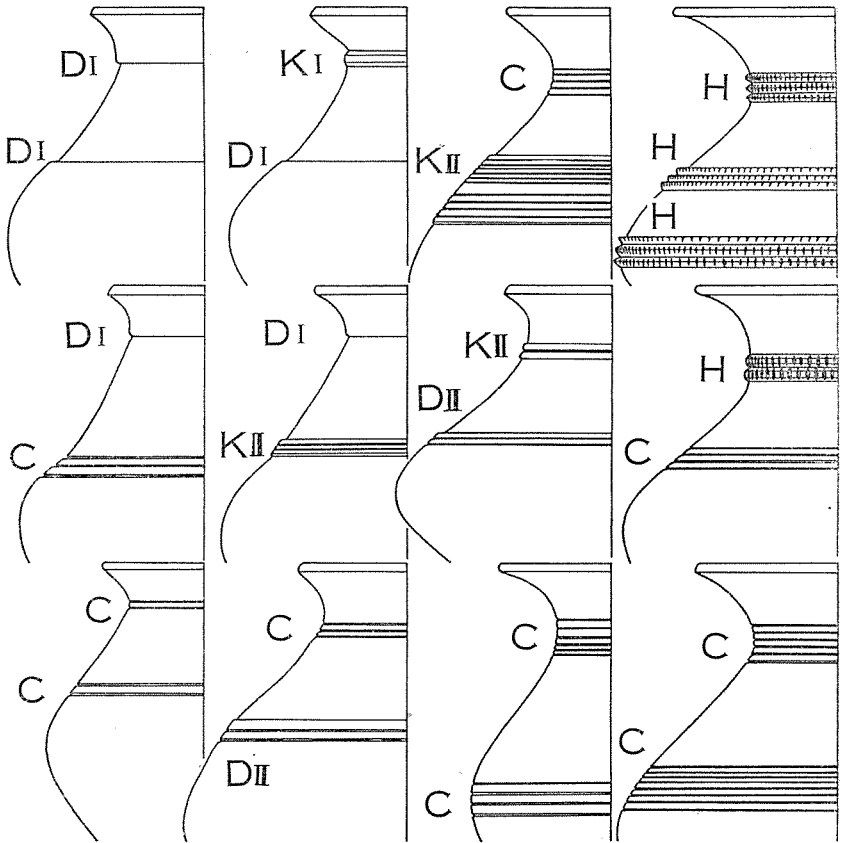
第1表 唐古第Ⅰ様式壺の紋様の組み合わせ・土器の大きさと比率との関係

1 段第Ⅰ種・第Ⅱ種(少条)、削り出し突帯第Ⅰ種・第Ⅱ種(少条)・少条の篋描き直線紋、および区分紋様をもちいないものは、これら同志でそれぞれ一組みになるのがつねであつて、貼り付け突帯・多条の篋描き直線紋とは共存しない。

2 貼り付け突帯・多条の篋描き直線紋は、たがいに共存するほか、まれに段第Ⅱ種(多条)・削り出し突帯第Ⅱ種(多条)と共存することがある。

という結果をえる(第一表)。このことはひとり唐古遺跡のみでなく畿内第Ⅰ様式全般にほぼあてはまるとおもふ。

土器の大きさと比率との関係 唐古遺跡の土器は小林博士によつて、A 腹径が器高よりも一、二割小さく、高さ二〇〜三〇センチメートル、口径一五センチメートル内外のもの。B 腹径が器高よりわずかに大きく全体がやや平たい感じでAとほぼ同じ大きさのもの、C より大型で高さ・腹径が三五〜四五センチメートル、口径が二五センチメートル内外で大きくひらいたものの三者にわけられた。これらとは別に高さ一〇センチメートル内外の小型の土器があるがこれも形態はAにぞくするものが多い。第1表は、こ



第9図 畿内第I様式壺の変遷 (左から右へ)
 D 段 C 篋描き直線 K 削り出し突帯 H 貼り付け突帯

畿内第I様式(古) 壺の区分紋様と

して段の使用がさかんだが、まだ、

削り出し突帯が出現していない段

階である。兵庫県吉田遺跡(直良

器をつぎのように(古・中・新)の三

段階にわけたいと思う。

描き直線紋・貼り付け突帯などと

年代の差違をもつことはあきらか

である。私は、畿内の第I様式土

器をつぎのように(古・中・新)の三

段階にわけたいと思う。

畿内第I様式(古) 壺の区分紋様と

して段の使用がさかんだが、まだ、

削り出し突帯が出現していない段

階である。兵庫県吉田遺跡(直良

器をつぎのように(古・中・新)の三

段階にわけたいと思う。

畿内第I様式(古) 壺の区分紋様と

して段の使用がさかんだが、まだ、

削り出し突帯が出現していない段

壺		段第Ⅰ種	段第Ⅱ種	篋描き直線紋 少条	削り出し突帯 第Ⅰ種	削り出し突帯 第Ⅱ種
吉田	口頸部界 頸胴部界	● ●○○	●●○○○ ○○○○○	○●●○		
雲ノ宮	口頸部界 頸胴部界	●●	●●●●	●●●●●●●● ●	●●●	●●●●●●●● ●
甕		口縁部 有段	無紋	篋描き直線紋 1条	篋描き直線紋 2条	篋描き直線紋 3条
吉田	頭部 刻目紋	●●●●	●●●●●●●● ●●●●	●		
雲ノ宮	頭部 刻目紋 無不		●●●●●●●● ●●●●●●●● ●	●●	●●●●●●●●	●●●●●●●● ●

第2表 吉田遺跡と雲ノ宮遺跡の壺と甕の比較

吉田遺跡については、〔直良・小林1932〕により●は実測図 ○は拓本に示されたものである。

信夫・小林行雄一九三二はこの段階初頭の単純遺跡である。吉田遺跡の壺に(第2表)は口頸部界に段第Ⅰ種・篋描き直線紋、頸胴部界に段第Ⅰ種・第Ⅱ種・篋描き直線紋をもちいており、まさしく板付式の壺における区分紋様の内容と一致している。そして篋描き線は、一―三条のものがほとんどである。その他の紋様には、板付式にもみられる紋様として、山形紋・重弧紋があり、板付式にはない紋様として木葉紋があらわれている。甕には、頸部有段のもの(頸部側が低いものと高いものと両者がある)、頸部無紋のものがある。口縁部に刻目紋をつけたものが多い。なお頸部に篋描き直線紋を一条めぐらしたものが一つある。甕においても板付式土器との距離は近い。

畿内第Ⅰ様式(中) 区分紋様として段をもちいるほか、削り出し突帯が出現した段階である。この時期においては、まだ土器製作に回転台は利用されていない。篋描きの線はあきらかに左から右へ、ひかれていく。各種の紋様もさかんにみられる。雲ノ宮遺跡の土器は少量ながら、この段階の単純な資料とおもわれる。壺には、口頸部界・頸胴部界のいずれにおいても、板付・吉田両遺跡の壺にはみられな

かつたあらたなる区分紋様、すなわち削り出し突帯がみられる。しかも、はなはださかんにもちいている。甕にも口頸部に直線紋をめぐらしたものが多く、直線紋の数は壺・甕いづれにおいてもなお三条をこえることはすくない。削り出し突帯上面や、篋描き直線紋の間には刺突紋・竹管紋・綾杉紋などをくわえたものがある。削り出し突帯第Ⅰ種のうち、高く突出したa種にくらべて、扁平なb種は出現がおくれた可能性がある。また、削り出し突帯第Ⅱ種のうち、少条のものにくらべて多条のものはやはり後出である。区画紋様から带状紋様への変質のきざしは、削り出し突帯のなかにもみられるのであつて、その第Ⅱ種多条(第九図上段右から二つ目)はまさしく二、三段に重ねる貼り付け突帯の前身である。雲ノ宮遺跡の削り出し突帯第Ⅰ種にはb種がみられず、また第Ⅱ種には多条のものが無い。さらに、篋描き直線紋もまた少条である。これは甕型土器の篋描き直線紋においても同様である。このようにみると、雲ノ宮遺跡の土器は、削り出し突帯がなお純粹に区分紋様としての役割をはたしている時期のものであつて第Ⅰ様式(中)でも前半をしめるものであろう。なお、削り出し突帯a

種の手法によると、口頸部から口縁部にかけてえがくカーブは、突帯をけずりだす前にくらべて、けずり終ったカーブがわずかに変り、口縁部外反のていどを助長する結果となる。削り出し突帯の発達は口縁部の広大化と無関係ではないかもしれない。

畿内第Ⅰ様式(新) 貼り付け突帯があらわれ、また、篋描

き直線紋が多条化し、区分紋様が带状紋様に変質した段階である。畿内では、この段階から土器の製作に回転台の利用をはじめた。その台は左から右にまわされた。したがつてこの回転を利用しての篋描き直線紋・貼り付け突帯紋の施紋は右から左へとむけられた。回転を利用してほどこすのにふさわしく、上下をつらねる紋様に姿をひそめ、線の条数は急増して細い平行線となつた。突帯上には刻目紋・布巻棒庄痕紋などをくわえている。われわれは、櫛描紋の成立と発展とに象徴される畿内弥生式文化の創造的展開をこの時期にはじまると考えた(田辺昭三・佐原真一九六六)。鶏冠井遺跡の土器はこの段階にぞくする。今里氏の西瓜破式・杉原博士の唐古Ib式の大部分がこの段階にぞくするであらう。しかし、そのなかには一部、削り出し突帯(少条)

や、少条の篋描き直線紋、および、これらの口縁部としてあまり口の開きが大きくない壺などがまぎつている。これは、他の貼り付け突帯、多条の篋描き直線紋とは時期を異にし、第Ⅰ様式中にさかのぼるであろう。

杉原博士の唐古Ⅰb式における疑問

杉原博士・神沢氏は、

さきへのべたように、唐古Ⅰb式(瓜破式)をいちおう一つの様式としてあつかいながら、篋描き直線紋をもつ壺・頸部無紋の甕・頸部に少条の篋描き直線紋をもつ甕をより古き一群、貼り付け突帯紋をもつ壺・多条の篋描き直線紋をもつ甕をより新しき一群として、とらえる可能性を論じた。ただし、その遺跡におけるあり方が、絶対的なものでなかつたためか、あえてこれを強くは主張していない。

私は、第Ⅰ様式新)においては、貼り付け突帯は削り出し突帯にかわつた、いっぽう、両者と平行して篋描き直線紋は継続して用いられたという考えを、すてさることはできない。板付式以来の篋描き直線紋が、この段階で多条化して畿内櫛描き紋の前身になったのである。篋描き直線紋と貼り付け突帯とがほどこされる器形には杉原・神沢氏の指摘どおり差のあることも事実であつて、頸の長い長手の土

器には篋描き直線紋を、頸の短い胴張りの強い壺には突帯紋をもちいる実例が多い。このうち第Ⅱ様式につたわるのは、前者であつて、器形の上でも紋様の上でも両者の密接な関係は否定できない、この壺におくられて、突帯紋という、第Ⅱ様式にのこらぬ紋様をほどこし第Ⅱ様式にのこらぬ、横に張つた器体の壺が前期の末に位置したとは到底考えられない。またさきに指摘したとおり、区分紋様から帯状紋様への変質は、貼り付け突帯と篋描き直線紋とに共通してみられるのである。胴部上半に帯状紋様として二、三段にわけて表出することもまた共通している。この両者が同時に存在し、また頸部無紋の甕が篋描き紋をもつ甕とともにみられるのが第Ⅰ様式新)の実態であろう。田辺昭三氏と私は、昭和三五年大東市中垣内遺跡竪穴内に、同時にすてられたと信じられる状態でこの段階の土器を多量にえた経験をもつている(田辺昭三一九六二)。

Ⅲ 山城の前期弥生式文化

縄紋式時代終末の山城 弥生式時代がはじまる直前、すなわち縄紋式時代晩期末のころ、山城ではどの地域でどれほ

どの人たちが、狩猟と採集の生活をおくっていたか。山城には縄紋時代後期の遺跡は、すくないながら知られているが、晩期の遺跡として明確なものは皆無に近い。晩期末の土器としては、今のところ、深鉢形土器が深草谷口町で五片(小川徹夫一九五八)、北白川別当町で一片、そして一乗寺向畑町で一個体分採集されているにすぎない。このていどの土器の量では、晩期末に集落がいともまなていたと強く主張することはできない。獲物を追つた人々が、この地にも足をふみ入れたことを証明するていどである。

弥生式文化の伝播 現状で判断するかぎりでは、山城の弥生式文化は、この地域の縄紋式時代人が稲作技術をはじめとする新来の知識を吸収して新しい時代にはいつたものとは思われない。無人にちかい状況下にあった山城に、農耕技術を身につけた人々があらたにやつてきたことによつて弥生式文化が成立したのであろう。

雲ノ宮遺跡は第一様式(中)前半にぞくしている。淀川・桂川・木津川の合流点に近く、河川の氾濫によつて放棄せざるをえなかつたためか、発掘資料によれば、それにすぐつづく時期の土器はみられない。いっぽう鶏冠井遺跡はそ

れにつづく時期、すなわち第一様式(新)にはじまつている。

畿内第一様式を三段階にわけける方法で、今後、畿内各地の第一様式に接しなければはつきりいえないが、私は現状では大和(唐古遺跡)、河内(鬼塚遺跡)などでは、弥生式文化が第一様式(古)の時期にはじまつたものと考えている。したがつて、山城ではそれより一段階おくれではじまつたことになる。

伝播の経路

最近まで山城では、弥生式遺跡の発見がすくなかつたし、また銅鐸などもみつかつていなかったのにたいして、丹後では大正以来、函石浜遺跡が貨泉2個と銅鏃を出土した遺跡として名高く、竹野郡栄町黒部・綾部市東国神社その他の遺跡とともに初期の京都府天然記念物調査報告に紹介されていた。また、福知山市観音寺出土の磨製石剣は、忠実に細形銅剣を模倣した形式、すなわち、有種式の代表例として有名である。銅鐸の出土例も古くから知られてきた。このような状況のもとで、山城の農耕文化の系譜を山陰から来たとする説がうまれたのは当然である。最近では林屋辰三郎氏がこの見解を述べている(林屋辰三郎一九六二)。

弥生式文化の山城へのコースとしてはもう一つの説があった。伊勢湾沿岸地方に入った弥生式文化が、琵琶湖沿岸地方を經由して山城へ入つたとする坪井清足氏の説である〔坪井清足一九五八〕。近江の弥生式土器が尾張・三河の弥生式土器と密接な関係をもっていることは古くから指摘されている〔森本六爾・小林行雄一九三八〕。しかし、戦後、旧深草練兵場内で発見された大遺跡は、畿内第Ⅱ様式に相当する単純遺跡であつて、ここでは畿内にはみられず近江の土器に等しいものが多量に出土した〔杉原莊介・大塚初重一九六二〕。中期初頭の段階で近江と山城との交渉が密だつたことの結果である。坪井氏はこうして深草遺跡が天津市南滋賀遺跡の分村ではないかと考え、山城の弥生式文化の系統を近江から来たものと想定したのであつた。

以上の林屋説・坪井説は、雲ノ宮遺跡・鶏冠井遺跡の第Ⅰ様式土器の検出に先立つ考案としては、それぞれ妥当性をもつものであつたが、現在では弥生式文化が山城へ入つた径路としては、もっとも常識的に淀川沿いであつたと考へるべきであろう。遺跡の立地する京都盆地西南部は、乙訓丘陵と生駒山系の北端部とによつてはさまれて狭くなつ

た部分で撰・河・泉の大平野につらなっている。そして、高槻市安満遺跡は山城への径路の上にある前期の大遺跡である。

京都盆地西南部 現在山城でしられている弥生式時代前期の集落遺跡は、雲ノ宮・鶏冠井両遺跡にすぎない。ほかには京都市左京区岡崎公園・北白川京大農学部^②の二カ所で、それぞれ一片ずつの第Ⅰ様式土器破片が採集されているだけである。南山城の広大な水田地帯には、前期の遺跡がまだみつかつていないだけで、将来発見される可能性があるのではないか、という疑問も起きてくる。八賀晋氏は、弥生時代以後の遺跡の立地が土壌の性質ときわめて密接な関係をもつことを発見して古代の開発について重要な説を掲げたが、雲ノ宮・鶏冠井遺跡付近ではまさしく初期水稻耕作の対象として好適なグライ土壌の分布範囲に含まれている。いっぽう、南山城の木津川以西田辺以南の地域には、グライ土壌がみられない。八賀氏はこの地域に前期弥生式遺跡が存在する可能性に否定的である。したがって、現状では山城で最初の水田が作られた地域は京都盆地の西南部に限定されてくるのである。

京都盆地の西南部、そこには弥生式時代に続く古墳時代のはじめから、豪族が定着して長岡丘陵に多くの古墳を残しており、ここはまた秦氏の本拠地として知られている。

また、奈良時代前期には、檜原かたはらに八角塔をもつ寺院のあったことも最近判明した〔佐藤興治一九六七〕。そして、平安遷都に先立つ十年間、京がおかれた地であったことはいままでもない。各時代にわたつて重要な役割をはたしてきたこの地域が、とりもなおさず山城ではじめて稲穂のみのつた地域であったことは決して偶然ではあるまい。

隣接地域との関係 弥生式時代の各時期にわたつて琵琶湖

沿岸地方と伊勢湾沿岸地方との交渉連絡が緊密であったことは、最近の研究でますますあきらかになりつつある。しかし、弥生式文化の山城への径路が近江をへてでなかったことは、雲ノ宮遺跡の発見によつてはつきりした。その発見によつて山城の弥生式文化が第Ⅰ様式(中)にはじまることは、あきらかになつたが、近江においては現在なお第Ⅰ様式(中)にさかのぼる遺跡遺物の発見がないのである。近江はそれ以西の地域におかれて弥生式文化にはいつたのであろう。いっぽう、伊勢湾沿岸への弥生式文化の伝播は第Ⅰ様式(中)

の段階であつたとみられる。伊勢湾沿岸への弥生式文化の伝播径路は山城―近江をへてのものではあるまい。山城と近江との交渉が明確になるのは中期初頭第Ⅱ様式の時期である。深草の土器の一部はたしかに坪井氏の考えるように近江からもたらされたか、あるいは人が来て作つたに相違ない。そして、この時期には近江系の土器は、摂津高槻市安満遺跡におよんでおり、また逆に播磨の土器が山城鶏冠井遺跡にもたらされている¹⁶⁾。摂津桜が丘の銅鐸と同範鐸が、近江新庄に運ばれたのもこのコースによつてであろう。

奈良盆地の北部、南山城では、まだ、第Ⅰ様式・第Ⅱ様式の時期の集落遺跡はみつかつていない。大和・山城の直接の交渉は中期初めまではなかったか、あるいはあつたにせよ、しげくなかつたであろう。

丹後半島には、あきらかに山陰系の第Ⅰ様式土器が存在しており、近畿への弥生式文化伝播系譜の一つが、日本海ぞいのものであつたことはいふまでもない。しかし、丹後の第Ⅰ様式土器のなかには、畿内の第Ⅰ様式土器と共通する削り出し突帯や段が存在する〔小江慶雄一九五七〕ので、前期の段階ですでに山城と丹後とのあいだの交渉があつた可能

性はみとめたいと思う。

山城弥生式文化研究の現状

かつて山城では綴喜郡金石右衛

門垣内遺跡が多量の石器の出土によって一部にしられていていどであつて〔藤岡謙二郎・岩根保重一九四四〕、畿内の一環をになう地域として山城の弥生式文化はいささか精彩を欠くかにみえてきた。しかし近來、山城では弥生式文化についての重要な発見があいついでいる。昭和四一年、粟野諛氏の綴喜郡田辺町平谷での発見があり、今年に入つては相楽郡山城町北綺田^{かばた}で、中期の弥生式遺跡^⑩が発見され、粟野氏と山田良三氏が綴喜郡田辺町三山木天神山で後期の住居跡から鉦状青銅製品・鉄刀子を発掘するなど〔山田良三・粟野諛一九六七〕、南山城にも弥生式の遺跡がふえつつある。また昭和三七年には綴喜郡八幡町志永井で一個〔宇佐晋一九六二〕、三九年には右京区梅が畑向地町で四個の銅鐸が出土し〔田辺昭三・佐原真一九六四〕、銅鐸分布圏のただなかにのこされてきた山城の空白がうめられることになつた。これらの発見は、開発の進展の結果によるものであつて手放しには喜べない。しかし、これらの諸発見によって、山城の弥生式文にかんして多くの点が解明されつゝあることは

事実である。統一国家成立の前段階をしめる弥生式時代の山城について、いまや、多くの角度から検討すべき段階になつた。しかし、本稿では単にこの地域における弥生式文化成立の問題に限って扱い、弥生式時代中・後期に關しては別の機会をもつことにしたい。

① 胎土中の砂粒は、土器の表面を磨研することによってしずめられるため、保存のよい破片で表面が鈍磨ぎされているものは目立たない。

しかし、保存不良で表面が一度むけたような状況のものでは砂粒がいちちるしくあらわれ、これと保存のよいものと差におどろかされるほどである。壺・甕によって砂粒の混入していどの差はとくにない。しかし、個体によっては多少の差違がある。

② 弥生式土器の黒斑については、従來焼成のさいの火まわりの悪さによるものとされてきた。しかし、そのあらわれ方が規則的なので、別の解釈が必要である。私は、土器が焼ぎあがつて、木ではさんでとりあげるさいにその木がくすぶつて炭素が土器に沈着したものと考へた〔小林・佐原一九六四〕。ただし、土器があついうちにとりだし、「つぎの土器を火のなかに入れたのかもしれない」とのべたことはありえないこととして訂正する。

③ この区別については、久永春男氏も愛知県知井宮遺跡の土器で指摘している〔久永一九六六〕。

④ *Talse-rim* という語はチャイルドもつかっている〔CHILDE一九五六〕。擬口縁には、本文中にふれた、内傾・外傾の斜面をなすもののほか、円頭のもの、円頭内傾のもの、その他各種の形態がある。スチブンソンは欧州の先史土器の実例をあげている。スコットはその一部

を引用して図示しているが、この語はもちいておらず、またその観察の重要性を認識していない〔SCOTT 一九五四〕。擬口縁にはこのほか刻目や、線刻、くぼみをくわえたり、棒軸をさしこむものなどもあって、様式の特徴として重要な役割をもつ。

さらに、古くゲツツエが指摘したように〔GÖTZE 一九二六〕、擬口縁の観察は、土器を底部側から作ったか、口縁部側から作ったかの判定の決め手となる。底の側から作りはじめて口におよぶのが世界的に一般らしく、ゲツツエもこれにふれ、またスチブソンは、欧州の先史土器の多くの実例をあげ、その逆が例外的なこと、ただしアフリカではそれが多いことを指摘している。ただし土俗例には例外もある。トルンワルトはメラネシアの土器作りが口からはじめることについてのマリノウスキーの観察を紹介しており〔THURNWALD 一九二七〕、山内清男博士によるとクランストーンもそれを指摘している〔CRANSTONE 一九六一〕。わが国では、山内博士が擬口縁を観察し、縄紋式土器が底部側から作られたことの論拠としている〔山内清男一九五八〕。具体的な資料をあげた正しい指摘としては、芹沢長介氏が神奈川県夏島貝塚の夏島式と田戸下層式の実例についてふれたもの〔杉原莊介・芹沢長介一九五七〕、小林達雄氏による、東京都多摩ニュータウン No. 53 遺跡の井草式の実例などもあるが、なお広い関心はもたれていない。いっぽう、縄紋式土器については、口縁部から作りはじめたとする想像説が八幡一郎・江坂輝弥氏などによって、なごらく主張されてきた〔八幡一郎一九六三・江坂輝弥一九六七A〕が、江坂氏は最近転向して八幡説を批判し、さらにすすんで、巻き上げが関東の土師器の土製支脚くらいにしかないことまで言及している〔江坂輝弥一九六七B〕。専門分野以外の、発言にかんしては、よりいっそう慎重でありたいものである。弥生式土器にかんしては、ふるく小林行雄博士が、「口を下にして作る土器」を考えたことがある〔小林行

雄一九三四〕。杉原莊介博士は、いまもってこれをすてがたいらしい〔杉原莊介一九六四〕が私は否定的である。ただし西日本の弥生式土器のうち、須玖式甕棺の作り方は特殊であって、底部側から作りはじめるが、口縁部をふくむ最上段の粘土帯は、その下端に擬口縁をもち、その下にある粘土帯の上端の擬口縁と接している。これにかんしては東光彦氏が精細な観察とデーターをあつめており、私も須玖式・黒髮町式について観察している。

⑤ このうち、下端の傾斜面が外傾となっているのは、底部として用意した粘土円板の上面をくぼませ周縁を厚くしてから、その側面上平に、この粘土帯を接着させた結果必然的に生じたものである。このように、畿内第Ⅰ様式の壺の底部には、しばしば、その側面上平に最初の粘土帯をくっつけ、そしてそれがはがれた痕跡をいしめすものがある。第Ⅱ図8もその一例である。なお、柏原市船橋遺跡出土の晩期末の鉢は底を二度にわけて作っている。まず、粘土円板の上面に指先で凹凸をつけて乾燥させたのち、その円板の上、全面にあらたに粘土をくわえその周縁の上面に最初の粘土帯をつみあげはじめている。この結果、底は突出する〔第五図上〕。私は、北九州の晩期縄紋式土器・板付式土器の、いわゆる円板貼付状底をもつ土器は、右の船橋例のように二重構成であるかどうかはともかくとして、やはり、円板の周縁に粘土帯をつみはじめて成形したものと推定している。円板貼付状という表現は、完成した器体に底をつけるよううけとれるのでこのましくはない。たんに円板状の底とよぶべきである。

⑥ 大阪府教育委員会に保管中の遺物である。便宜をあたえられ、かつ公表をゆるされた同委員会と藤井直正氏に感謝する。

⑦ 今里氏は西瓜破遺跡とよんでいるが、ここでは現在ふつうよばれているように瓜破遺跡とよんだ。なお、今里氏の西瓜破第二類は第Ⅲ・第Ⅳ様式、第三類は第Ⅴ様式にぞくしている。

⑧ 中・四国地方の遠賀川式土器が近年、第Ⅰ様式と第Ⅱ様式とに分断されてしまったのは遺憾である(金関忠「山陰地方Ⅰ」・山本清「山陰地方Ⅱ」・潮見浩「山陽地方Ⅰ」・鎌木義昌「山陽地方Ⅱ」・松岡文一「北四国地方」『弥生式土器集成』本編一 昭和三年)。

⑨ 私は昭和三年、森貞次郎博士のもとで板付遺跡の土器、乙益重隆氏のもとで斎藤山遺跡の土器を拝見し、かつ両氏から多くの教示を受けた。両氏の御厚意に感謝する。

⑩ 杉原莊介・大塚初重両博士は、板付式の壺について、「一見、口縁部、頸部、胴部、底部を別々につくり、あとで接合した感じを受け、」それぞれ部分が別個に製作されて後に接合したことを有力に物語っている」とのべているが、あやまりである。

⑪ この段については、竹中岩夫氏が、晩期縄紋式土器の深鉢の頸部と胴部との間におかれた突帯のルジメントと考えている(「竹中岩夫一九〇七」)。

⑫ 前者は星野猷二氏、後者は近藤喬一氏の採集によるものである。

⑬ 八賀理論は、近刊の『日本史研究』に発表の予定ときく。その内容の一部は発表に先立って、「田辺昭三・佐原真一九六六」に紹介の機会をあたえられたが、今回も同氏の教示をえた。感謝の意を表する。

⑭ 久永春男氏は、愛知県二反地遺跡の資料によって尾張地方の前期の土器を、二反地Ⅰ式・二反地Ⅱ式(西志賀古式)・二反地Ⅲ式(西志賀新式)の三段階にわけ、二反地Ⅰ式が、畿内第Ⅰ様式の古い段階に相当するものと考えている(「久永春男一九六六」)。この見解は、畿内第Ⅰ様式を三段階にわけ、伊勢湾沿岸の弥生式文化がその(中)からはじまるとする佐原の見解とはからずも同時に発表され、「田辺昭三・佐原真一九六六」ここに両説が対立することになった。河出『日本の考古学』Ⅲの巻末の編年表では久永説におしきられて、親子のような畿内第Ⅰ様式と二反地Ⅰ式とが肩をならべている。伊勢湾沿岸地方の前

期弥生式土器の編年には、他に紅村弘氏の家があるが、貼り付け突帯をもつ、胴のはった壺が、削り出し突帯をもつ胴のはらない壺に先行するとの考えは、畿内における所見と矛盾し、したがえない(「紅村弘一九六三」)。伊勢湾沿岸地方においても削り出し突帯が古く貼り付け突帯がおくれたであろう。ただし、畿内では、削り出し突帯の時期にともなう木葉紋が、ここでは貼り付け突帯にともなうものずればみとめられる。

⑮ 原口正三氏の発掘資料について、同氏の教示をえたことを感謝する。

⑯ 「田辺昭三・佐原真一九六五」写真一三一・88、第一六一図88。

⑰ 栗野諺氏の教示による。

⑱ 工藤善通氏の調査によると畿内第Ⅱ様式にぞくする。

文献目録

今里幾次 一九四二 「畿内遠賀川土器の細別に就て——河内西瓜破遺跡水門西地点調査概報——」(『古代文化』第一三卷第八号)

宇佐晋一 一九六二 「京都府八幡町出土の銅鐸」(『古代文化』第九卷第三号)

江坂輝弥 一九六七A 「日本文化の起源」

江坂輝弥 一九六七B 「洞窟遺跡の諸問題」『日本の洞窟遺跡』

小川慶雄 一九五七 「丹後古代文化の源流——竹野川流域の弥生式文化を中心として」(『京都学芸大学学報』第一号)

小川敏夫 一九五八 「京都市深草出土の晩期縄紋式土器」(『古代学研』第一八号)

紅村 弘 一九六三 『東海の先史遺跡・綜括編』

小林行雄 一九三三 「吉田土器及び遠賀川土器とその伝播」(『考古

学』第三卷第五号)

小林行雄 一九三四 「土器の製作と轆轤の問題」(『考古学評論』第一卷 第一号)

小林行雄・佐原真 一九六四 『紫雲出——香川県三豊郡詫間町紫雲出山弥生式遺跡の研究』

佐藤興治 一九六七 「榑原廃寺発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』)

杉原荘介 一九四九 「伊予阿方遺跡・片山遺跡調査概報」(『考古学集刊』第二册)

杉原荘介 一九五〇 『古代前期の文化』(『新日本史講座』)

杉原荘介 一九五五 「弥生文化」(『日本考古学講座』4、弥生文化)

杉原荘介 一九五七 「弥生式文化」(『図説日本文化史大系』1)

杉原荘介・大塚初重 一九六一 『京都府深草遺跡』(『日本農耕文化の生 成』)

杉原荘介・神沢勇一 一九六一 『大阪府瓜破遺跡』(『日本農耕文化の生 成』)

杉原荘介 一九六四 「遠賀川式土器」(『日本原始美術』3)

竹中岩夫 一九六〇 「福岡県垣生出土の弥生式前期型土器の変遷」(『古代学研究』24)

田辺昭三 一九六二 「中垣内遺跡の調査」(『大阪府の文化財』)

田辺昭三・佐原真 一九六四 「京都市梅が畑出土の銅鐸」(『日本考古学 協会昭和三十九年度大会研究発表要旨』)

伴う埋蔵文化財発掘調査報告書)

田辺昭三・佐原真 一九六六 「弥生文化の発展と地域性——近畿」(『日本 の考古学』Ⅲ弥生時代)

坪井清足 一九五八 『風土記日本』七総括編

直良信夫・小林行雄 一九三二 「播磨国吉田史前遺跡の研究」(『考古学』 第三卷第五号)

林屋辰三郎 一九六二 『京都』(岩波新書)

久永春男 一九六六 「弥生文化の発展と地域性——中部——東海」 (『日本の考古学』Ⅲ弥生時代)

藤岡謙二郎・岩根保重 一九四四 『生駒山脈——その地理と歴史を語 る』

森本六爾・小林行雄 一九三八 『弥生式土器集成図録』

山田良三・粟野諒 一九六七 「異形銅器を出土した京都府三山木弥生 式遺跡」(『日本考古学協会研究発表要旨』)

山内清男 一九五八 「縄文式土器の技法」(『世界陶磁全集』第一卷)

八幡一郎 一九六三 『縄文土器土偶』

CHILD, V. G. A Short Introduction to Archaeology. 1956.

CRANSTONE, B. A. L. Melanesia A Short Ethnography. 1961.

GÖTZE, A. Töpferei, Ebers Reallexikon der Vorgeschichte Bd. XIII. 1929.

SCOTT, L. Pottery, A History of Technology (Oxford) Vol. I. 1954.

STEVENSON, R. B. K. Prehistoric Pot-Building in Europe, Man No. 97 May 1953.

THURNWALD, R. Technik, Ebers Reallexikon der Vorgeschichte Bd. XIII. 1929. (奈良国立文化財研究所授)

Jōri, no relation can be found. According to the Harima case, Jōri seems to be numbered on the basis of the situation of Kokufu, but in this case the partition of land in Jōri was held at first, while Kokufu was indifferently established, and then Jōri seems to be numbered on the basis of the situation of Kokufu.

Establishment of the *YAYOI* 弥生 Culture
in *YAMASHIRO* 山城

—the subdivision of Early *YAYOI* Period in *KINKI* 近畿 and
the position of the pottery from *KUMONOMIYA* 雲ノ宮 site—

by

Makoto Sahara

In *KINKI* 近畿 district five successive types of *YAYOI* 弥生 Pottery are grouped into three main periods; Early (Type I), Middle (Type II-IV) and Late (Type V).

I. *IMAZATO* (1942) and S. *SUGIHARA* (1950) have proposed that Early *YAYOI* in *KINKI* is to be subdivided into two phases. In our opinion, however, on the basis of technological and typological study of the pottery, it would rather be better to subdivide Early *YAYOI* into three phases. According to our subdivision, *KUMONOMIYA* 雲ノ宮 site belongs to the middle phase of Early *YAYOI* and is the oldest *YAYOI* site known in *YAMASHIRO* (Southern part of Kyoto Prefecture). This paper covers also the course of *YAYOI* culture to *YAMASHIRO*, and the cultural relation of *YAMASHIRO* with neighbouring regions in Early *YAYOI* Period.